専念寺通信

専念寺通信

八月号（ＮＯ．８４）

中越を襲った大地震、各地を見舞う豪雨やそれによってもたらされる土砂崩れなどの災害、７月後半は自然の恐ろしさと、はたしてこの現象は本当に「天災」なのか、私たちが長く怠ってきた結果の「人災」なのではないか、と考えさせられる不安定な天候でした。そして、早くも８月、暑い日が続きますが、みなさまおかわりありませんか？

☆盂蘭盆会

7 月の 13 日から 16 日まで、大玄関に写真のようなほおずきや馬、牛などを飾り、お参りのみなさまをお迎えいたしました。今年のお盆は台風が日本列島にやってきた時期と重なり、みなさま、傘をさし、足元までずぶ濡れになってのお参りとなりました。玄関にタオルを用意して、みなさまに使っていただくようにしましたが、お中日は雨足も強く、風も出て、お線香の火も消えてしまいそうな天候でした。お参りくださった方の総件数は１１６件、それでもずいぶん大勢のみなさまにお会いできました。13 日の朝早く、いつも一番においでになる檀家さま、ご自宅で採れた無農薬の野菜を持って来てくださる檀家さま、雨のあいまをぬってとても長い時間をかけて丁寧にお墓を磨いていらっしゃる檀家さま、ご自分の闘病生活について、言葉少なに、けれど切実な思いを込めて話してくださる檀家さま、新しく区画をもとめられ、墓石のデザインを相談される檀家さま。ことしも玄関先での短い会話とは言え、皆さまからいろいろなお話を聞かせていただきました。配偶者を亡くされたあと、自分の半生を本にして自費出版し、「最初に専念寺さんに持ってきて墓前とご本尊に報告しようと思いました。」ときれいな本を下さった方もいらっしゃいました。読ませて頂きましたが、ご夫婦の強い絆と、とりわけご主人を亡くされたあと、仏教に救いをもとめ、心のやすらぎや生きる張り合いを取り戻されていく様子に感動いたしました。どなたかが彼岸に旅立たれると、その後此岸に残された人間は、この方のように、おだやかにその絆を結びなおすケースもあれば、にわかには信じがたいような骨肉の争いに発展するケースも、残念なことに少なくありません。彼岸にいるひとは争いを望んでいるでしょうか。自分の血をわけた人たちの争いを望んでいるでしょうか。ひとりの人間の死をきっかけに私たちは実に多くのことを学ぶことができます。長い時間をかければ、さらにもっと多くのことを学ぶことができるかもしれません。此岸から彼岸へ渡っていく人の遺す財産は此岸で勘定のできるような、そんな小さなものだけではありません。私たちは、身内の死という、この貴重な機会を静かに受け止め、悲しみや混乱や後悔や怒りのあとに来る、本当の「彼岸」からの贈り物を謙虚に受け止めるのです。そうすることによって法然上人の説いた「愚者」たりうることができるのではないでしょうか。謙虚に、けれど力をもって生き続けることができるのではないでしょうか。

平成 19 年 8 月 1 日

大黒